

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494



第五福竜丸を前に

## 第五福竜丸展示館二十周年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

一つの夢を現実のかたちにしたこと、そしてそのことにわずかでも貢献できたことは、私にとって幸せであった。  
この六月十日に開館二十周年を迎えた第五福竜丸展示館は、文字通りゼロからつくりあげたものであった。  
原水爆禁止を求める草の根運動の担い手たちによるねばりづよい努力が広はん各界各分野の支持をえて、ついに行政をも動かすまでになった。私も学生時代からサイエンス・ボランティアの一人として、できるかぎりの協力を惜しまなかった。  
世界には戦争と平和に関するミュージアムは数多くあるが、一点でこれほど壮大な展示物はめずらしい。  
単にパーツを並べただけの場合とはちがって、実物船が全身の姿において水爆の恐ろしさを訴え、人類への警告を発する迫力はすさまじいものがある。  
この木造船は、ある意味で、日本の文化をも体現しており、当時のごく普通の人びとの生活をにじませている。将来、時間がたてばたつほど、最先端兵器と文化・社会・歴史との類まれな組み合わせが浮かびあがってこよう。  
核兵器と人類のかかわりは、次の世紀においてもまちがいに重要なテーマとして残るであろう。  
現在の大人たちができることは、この貴重な船を、物理的にも財政的にもいっそう安定した基礎のうえに保存し、国内外からの来館者にとって、快適で、分かりやすく、船からのメッセージを読みとりやすくするよう、たとえば工夫・改善を加えることである。  
多数の見学に訪れる子どもたちの中には、強い印象をうけて自分の進路につなげて真剣に考えるものも、少数ではあるがみられる。多くの子どもたちは、そのときはあまり心にとめてくれないかもしれないが、それでもよい。十年後、二十年後にそのことを少しでも思い出して、各自のおかれた条件のなかで、人間性をブラッシュアップする一助に思えばと思っている。  
これらの子どもたちは、二十一世紀において活躍して代わって行く。国際化と情報化の時代において、彼らは、今日の大人たちに欠けている国際人としての資質を体得し、十分な情報処理能力をいかして、この第五福竜丸展示館にたいして、私たちが考えもおよばないような付加価値をつけてくれるものと信じる。

## 被曝ロンゲラップ島民へ小型船を贈ろう

— プンブンプロジェクト発進 —

清水 谷子

一九八六年に初めてビキニ環礁に行った時、「島内にある施設や器具を持ち出すな」という米政府による英語、マーシャル語、日本語の立看板があり、とても驚いた。何故こんな所に日本語があるのだろう。私は当時マーシャル諸島の首島マジュロに住んでいたが、町中で日本語など見たことがなかった。

第五福竜丸は、「たまたま」ビキニ近海で操業して被曝した、



1940年代当時の小学校3年生の絵日記に描かれた太平洋の旧南洋群島

と聞いていたから、日本語の看板があるのが解せなかった。多くの日本人がビキニに來なければこんな看板必要ないのだから。しかし、その後知ったことだが、太平洋の真ん中のこの辺りには日本漁船が沢山来ていたのだ。

お話しはさかのぼって一九四〇年代、小学生の私たちの地図。太平洋の地図の真ん中に台型の赤い線で囲まれた所があった。日本本土、朝鮮半島、台湾なども赤だった。マーシャル

など太平洋の島々は小さすぎる点々なので、まとめて赤い線で囲ってあった。その頃、『プンブン』が初めてマーシャルに登場した。プンは日本から

来たのだ。マーシャル語にはそれまで『ワオ』と言う船を意味する言葉しかなかった。それはエンジンのない「カヌー」などのことだった。彼らはそのディーゼル音から動力付きの船をプンブンと名づけた。

そして、今一九九〇年代、マーシャルには、そのプンブンがなくして生死に関わる状態の人々がいる。一九五四年のビキニ水爆実験で被曝したロンゲラップ島民である。三月一日と二日は、死の灰の中に五〇時間も埋もれていた。三年後、アメリカは島の安全宣言をして島民を帰島させた。しかし、彼らは残留放射能に苦しむこととなり、八五年五月、「子供たちの未来のために」と母なる島を捨て、メジャト島に移住した。

八八年八月、第五福竜丸展示館の秦小夜子さんとメジャト島を訪ねた。二人でマーシャル語のテープをつけた『トビウオのぼうや』は「ぼうやです」の紙芝居を持って島を歩いた。三カ所で子供を集めたが、みんな熱心に見てくれた。島は聞いていたよりずっと小さかった。潮が満ちて来ると、歩ける所はぐんと減ってしまう。とて

も固い木が水辺近くに生えていて、ゴムゾリーで歩く日本人のやわい足は傷だらけになる。  
周囲四キロ、標高一・五メートルの小さな島に四〇〇人が暮らしている。

植物や魚介類は極めて乏しく、砂地に種をまいても食べられる物は育たない。この十一年間、アメリカの援助でかろうじて生活してきた。その食料も海が荒れると何カ月も届かない。届いても中味は同じ味の缶詰ばかり。豊かだったロンゲラップ島に帰りたいという島民が増えてきた。戻れば「子供たちの未来」はどうなるのだろう。ロンゲラップは依然残留放射能の島なのだ。

半世紀前日本人が持ちこんだプンブンをメジャト島に贈り届ければ彼らは魚をとり海に出られる。一三〇キロ離れたイバイ島の病院にも行ける。

プンブンは、太平洋の真ん中の点々のまたその点であるメジャト島へ発進しなければならぬ。私はその「クルー」の一人になったつもりで頑張りたい。  
(プンブンプロジェクト  
神奈川事務局代表)

### 東西の科学者が率直に対話

——パグウォッシュ会議の発足と発展(1)——

小川 岩雄

一九九五年に、核戦争による人類破滅の可能性を警告したラッセル・アインシュタイン宣言は、全世界から熱烈な支持を受け、宣言が呼びかけた科学者の会議は、一九五七年七月、カナダ出身のアメリカの資産家サイラス・イトン氏の全面的援助の下、氏の郷里であるカナダ東岸の漁村、パグウォッシュで初めて実現し、小規模ながら注目すべき成果を収めた。

イトン氏は鉄鉱の採掘で財を成し、鉄道会社などを経営する実業家で、数年前からパグウォッシュの実家「哲人荘」(原名はロダンの彫刻「考える人」に因んだ「Thinker's Lodge」)で知識人の会合をたびたび開き、現代人の生き方を探ってきた老紳士である。財政的に援助はするが、会議の内容にはいっさい口を出さない氏の謙虚な人柄と行き届いた歓待は参加者の気持ちを和ませ、その面でも

会議に大きく貢献した。会議の参加者二十二人のうち、十五人が物理学者、二人が化学者で、四人が生物学者、一人が法律家だった。会議の最大の目的は核実験や核戦争の影響の評価であったから、この構成は極めて適切だったといえよう。

参加者中にはノーベル賞受賞者三人(湯川、ムラー、パウエル博士)の他、放射線医学の権威や「死の灰」の調査を続けてきた研究者も含まれ、小人数ながら錚々たる顔ぶれであった。また地理的には、米七人、ソ日各三人、英加各一人、豪澳中仏各一人という分布で、日本からは湯川秀樹、朝永振一郎両博士のほか、筆者も国内の放射能汚染のデータを携えて参加した。思いがけなくこの歴史的な会議に出席できたことは、私にとって生涯忘れぬ思い出となった。なお三人の渡航費は、当時、

平凡社社長の故下中彌三郎氏が負担された。感謝にたえない。パグウォッシュはエビの名産地で知られる静かで景気の良い別荘地だが、当時はホテルなどなく、参加者は「哲人荘」を始め、近くの引き込み線に停めたイトン氏の鉄道の寝台車や民家に分宿し、会議は村の小さな公会堂で行われた。私も朝永先生と一緒に行われ、毎日会議に通った。村中が会議に好意的だった。

冷戦のさ中、東西の対話がほとんど途絶していた当時、核戦争の回避などという国際問題を両陣営の科学者が議論するともなれば、マスコミの関心が集中することは必至だった。それに伴う喧騒や、取材の煩わしさを避け、こういう静かな場所に参加者たちが自由に話し合えたことは、たいへん好都合であった。

さて会議は七月七日から十日まで開かれたが、開会の前夜、「哲人荘」のサロンで顔合わせと非公式の会合が行われた。席上先ず米国の原爆開発を最初に提案したレオ・シラード博士が、戦中戦後の個人的経験を詳しく語り、とくに広島・長崎の壊滅が阻止できなかった

た痛恨を切々と述べた。博士がこの心境を日本人がいる席で披露したのは多分これが初めてで、博士はかなり緊張していたようだ。翌日午後開かれた最初の本会議では、イトン氏の歓迎の挨拶とテープによるラッセル卿のメッセージ伝達ののち、中心議題である「平時と戦時の放射線障害」について一般的な討議が行われた。先ず今度の会議の開催に向けて献身的に活動してきたロンドン大学のJ・ロートブラット教授が「平時と戦時下の核エネルギーによる障害」と題する包括的報告を行い、続いてムラー博士らが意見を述べた。朝永博士と筆者も日本での放射能の測定結果を報告した。これらの内容を整理するため、ロートブラット博士を責任者とする小委員会が作られ、深夜まで議論が続けられた。この小委員会は自然科学的な主題だったためか、各委員の政治的立場の違いを超えて、完全に一致した結論に到達できた。

他の二議題(「核兵器の管理」と「科学者の責任」)についても翌日に一般討論の後小委員会がつけられ、それらの報告に基づいて会議の声明書起草され採択された。(立教大学名誉教授・協会理事)

### 「ビキニ事件三浦の記録」を取材して

森 田 喜 一

記憶はあっても資料がない「ビキニ事件三浦の記録」の取材は新鮮な驚きの連続だった。

この仕事を始めたときは、簡単にできるだろうと軽く考えていた。なにしろ、私自身、三浦で事件の騒ぎを見ながら生活していたし、私の回りには事件の関係者や当事者がたくさんいる。どの話を誰に聞けば良いかといったことは大抵の見当がつく。その多くが、面識のある人たちだ。考古学に比べたら四十年前の出来事の掘り起こしなんか赤ん坊みたいなものだ。私はルンレン気分で行事始めた。しかしこれは甘かった。たしかに、記憶はあったが、それを裏付ける資料がないのだ。同じことでA氏とB氏の記憶ではズレがある。両方を信じたら矛盾が起きる。四十年という歳月の流れは想像以上に厳しい。そして私の知らなかった新事実が次々に出てきた。まさに驚きの連続だったのである。

仕事を初めて間もなく、「第五福竜丸は三崎の船だった」という

話を聞いた。うかつにも私はこのことを知らなかった。改めて聞いてみると多くの人がこのことを知っていたが、その詳しいいきさつとなるとだれも知らない。これには困った。

放射能と船員  
魚市場で放射能を検出されたマグロは海に捨てられたり、地中に埋められたりした。地中に埋める作業に従事した人からも多くの証言を得ることができた。

では、埋めた日は、魚種は、数量は、放射能の量は、漁獲した海域は、船名は、など具体的なことになるかとほとんどわからない。

当初私は、地中に埋められたマグロのマップを作ろうと思った。多くの人たちから「××に埋めた」「○○にも埋めた」という証言を得たが、これを裏付ける資料が手に入らず、マグロマップづくりは断念せざるを得なかった。

この事件では、汚染されたマグロの検査は熱心だったが、船員に対しては健康診断がほとんど行わ

れなかった。後になって、船員の健康がおろそかに扱われたことが問題となりその矛先は、主に船主に向けられたがこれはおかしい。マグロの検査と廃棄を決定したのは厚生省である。この時点で、船員の健康診断も義務づけるべきだった。大急ぎで水揚げし、また大急ぎで出港していかなければならなかった当時の船員たちの健康診断は、やりにくかったのかも知れないが、放射能が検出されたとなれば、船一隻分のマグロをまるごと廃棄させるだけの権限をもった厚生省が、船員の健康診断を義務づけることくらい、それほど難しいことではなかったらう。

当時の検査では、船員からも多量の放射能が検出されたことが記録されている。この船員たちが、その後放射能とは全く関係のない生活を送ったとは考えにくい。ただ、船員の側も、放射能を浴びたことを公表してほしくないという気分があった。放射能を浴びたことがわかると、その後の私生活で家族も含めていられない差別を受けることが懸念されたからだ。

貴重だった展示館の資料  
多くの証言を裏づける資料が欲しいと探している段階で、第五福

竜丸展示館の存在を知った。初めてここを訪ねたとき、私の目に飛び込んできた資料はみんな驚くべき内容のものばかりだった。それが、これから執筆する上で必要なものかどうかを見極める余裕もありませんまま、手当たり次第にコピーをとって館の職員を仰天させた。

ここで得た資料は、多くの人の証言を証明したり、修正したりした。未知の発見もあった。三崎のマグロ船第七事代丸が焼津の第五福竜丸に変わったいきさつもここですべてを知ることができた。そして、私が大きなウエイトをおいた、久保山さんが三崎にいたことを証明する資料もここにあった。調べれば調べるほど、ビキニ事件で三崎が受けた影響は、全国で最も大きいことを知ったが、三崎にはそれを証明する資料がほとんど残されていない。改めて第五福竜丸展示館のもつ重要性を知ることができた。今後、さらに貴重な資料を集めつつ、多くの人々に、ここがビキニ事件の原点であることを知らせ、核兵器廃絶への警鐘を鳴らし続けて頂きたいと思う。

(フリーライター)

「ビキニ事件三浦の記録」は一九九六年三月一日、三浦市の編集で発行されました。